

令和 5 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 教育の質的転換に関する事業
地域への文化発信の拠点となる取り組み

申請組織 中学・高校・大学生ディベート大会 椋山女学園大学杯実施班

申請組織長 役職名 学部長 氏名 山口雅史

統括責任者 役職名 教授 氏名 吉田あけみ

課題名 中学・高校・大学生のディベート大会 椋山女学園大学杯

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	吉田あけみ	人間関係学部教授	共催団体との折衝事、事業 PR、大会当日の運営
	広報	藤原直子 小柴住まゆ子 谷口功 東珠実 影山穂波	人間関係学部教授 人間関係学部准教授 人間関係学部教授 現代マネジメント学部教授 国際コミュニケーション学部教授	学内大会の学生への周知

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

中学生・高校生・大学生のディベート大会を、全国教室ディベート連盟東海支部と共催して実施する。その準備の論題講習会やディベート指導者養成講座を、本学でおこなう。これらの活動により、アクティブ・ラーニングとして注目されている、ディベート文化を中学・高校・大学生をはじめとして、教員並びに広く市民にも普及させていく。

ディベート大会などの運営スタッフとして学生が参加することにより、他大学の学生と交流し、またイベント開催なども経験することにより、学生のコミュニケーション力等を高める。

椋山女学園大学杯の贈呈により、東海地区の中学・高校生への PR につなげる。指導者養成講座の開催により教員に向けての PR にもなる。

2. 事業方法（特色・独創性）等 (300 字程度で記述)

主に、東海地区の中学生・高校生などが、例年、中学・高校それぞれ 50 人から 100 人程度、学校数としては、それぞれ 15 校から 20 校程度集う大会や講習会である。さらに、東海地区のみならず、春大会は全国の高校からの参加もあり、東海地区の文化発信の拠点として、大学の PR にもなると思われる。

尾張地区の私立中学・高校からの参加が多かったが、三河地区や公立中学・高校からの問い合わせも増え、常連校以外の参加もみられ、すそ野が広がりつつある。

3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

6月4日(日)ディベート甲子園の論題研究会と公式練習会と審判講習会を共催した。中学・高校合わせて100名ほどが参加した。

7月15日(土)16日(日)、第31回東海地区中学・高校ディベート大会<第28回ディベート甲子園東海地区予選>を共催した。観戦講座も実施した。2日間で延べ200名ほどの選手・スタッフが参加し、あつい戦いを繰り広げた。本学で対面開催できたこともあり、対面開催による全国大会では、東海地区の中学が優勝並びに三位に、高校が優勝することができた。本学の協力が多大であったと評価された。

10月21日(土)に、ディベート甲子園の振り返り講座を共催した。大学生や社会人の参加もあり、ディベートの学びと共に論題についての理解も深まった。

11月11日(土)、秋季ディベート交流会を共催した。優勝チームには、栢山オリジナルグッズを贈呈するなどし、学園のPRにも努めた。

11月29日(水)に、第七回栢山女学園大学学内ディベート大会を開催した。人間関係学部の学生がディベートを楽しんだ。ディベートとは何か、ディベートで培われる力等の解説を聴いたのち、ワークシートを使って立論等を作成し、それぞれのチームが肯定側と否定側の両方の試合を経験した。ディベートは単なるコミュニケーション能力の向上だけでなく、論理的な思考力の形成にも大変効果的であること、自分事として物事を考えるきっかけになること等が確認されたイベントになった。卒業論文の作成に向けて、論理的に考えること、資料を探し、エビデンスと真摯に向き合うこと等、学生たちにとって、多くの学びがあった。

3月3日(日)には、論題研究会を、3月23日(土)24日(日)には、栢山女学園大学杯を予定。

4. キーワード (本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載)

①ディベート	②学生のスキルの向上	③学園のPR	④高大連携
⑤アクティブ・ラーニング	⑥	⑦	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。)

中学・高校生向けのディベート講座を栢山女学園大学杯として2017年3月より開催してきている。これを継続していくことは、東海地区の文化発信の拠点として本学が寄与することができ、また本学の活性化にもつながると考える。さらに、中学生・高校生だけでなく、大学生にも裾野をひろげることにより、大学の教育の質的転換にも資すると思われる。今年は、学内大会を日進キャンパスで実施したこともあり、人間関係学部生のみ参加となってしまったが、学生のディベート力の向上には、目をみはるものがあった。

今年度は、全面的に対面開催にでき、充実した事業を実施することができた。しかしながら、やはりコロナ前に比べると参加者数は減少している。来年度は、出来れば新型コロナウイルス感染症の感染状況がおさまり、以前のように多くの方々に集ってもらい、ディベート甲子園に向けての論題研究会からスタートし、春の栢山女学園大学杯まで、中学生・高校生・大学生・教員・社会人に向けて、様々なディベート大会を実施し、アクティブ・ラーニングとしてのディベートの魅力を宣伝し、学園のPRにもつなげていきたい。